

(digital) Soba Choko についての研究

Research into (digital) Soba Choko

竹内 創 TAKEUCHI Hajime

(芸術学部デザイン領域)

昨年度より継続して日仏合同プロジェクトのために実施した調査研究の活動をここで取りまとめる。



「東海道五十三次」見附 葛飾北斎

このプロジェクトの始まりは、ジャン＝ルイ・ボワシエ氏（パリ第8大学名誉教授、研究者）から蕎麦猪口をテーマにしたリサーチと展覧会を準備している、と聞いたところから始まっている。

“蕎麦猪口”と聞くと一部の収集家の趣味、という印象がある。生活の中に浸透している「無名のデザイン（民藝）としての「蕎麦猪口」には気になっていた程度であった。

そもそも蕎麦猪口とは何であるのか。

名前の由来は、磁器研究者、浅川伯教の「朝鮮陶磁名考」によると朝鮮陶磁器の「鐘甌」（chongku）によるものとされている。それが日本で「ちよく」と呼ばれるようになったのだが、猪の口に似ているからではないという。

それは音を借りて来たに過ぎず、語源は日本ではないということである。蕎麦猪口とは一般的にあげ底で桶形の深向付（ふかむこうづけ・筒型で底が深くなったもの）の呼び方である。その後蕎麦の器として利用され始めたため「蕎麦猪口」と呼ばれている。

蕎麦切りが始まったのが17世紀以降とされているが、猪口に汁を入れ、これに蕎麦をつけて食べる、という習慣ができてから「猪口」の前に「蕎麦」を付けて現在のようなかたちになってきたようである。



蕎麦猪口（砥部焼）

蕎麦猪口形の器は、高級食器として17世紀後半に誕生したものであるが、有田地域の歴史の中で技術的、デザイン的な変遷を重ねていながら庶民の器として全国へ広まっていったようである。その後使い勝手の良い器（雑器）として評価されるようになり、染付絵柄の面白さ、大量に生産される手軽さなどから現在も多くの愛好家を魅了している。

蕎麦猪口の範疇

蕎麦猪口は江戸時代から庶民にとって都合のよい多目的食器であったことは現代にも受け継がれている。

当時は蕎麦猪口を持ち上げずに置いたまま、時には立って今よりも長い蕎麦を食べていたようである。

そのことから求められてくる機能が明確になった。安定性が必要であり、設置面積が広くなければいけない。また汁が飛び出さない程度の深さ、そして片手で持つために使いやすいことも求められるのである。

サイズ

「コップもしくはカップ」というものは世界中どこにも存在するが、ほぼ蕎麦猪口と同程度の大きさとなっている。

蕎麦猪口は、おおよその高さが6cm前後であり、デザインは尻すばみになっており、口径が8cm、底径が6cm。高さと同口径、底径と同口径の割合は1:1.3となっている。

この範疇のものを「蕎麦猪口」としているのものが一般的である。



蕎麦猪口 (大日窯)

絵柄

柳宗悦いわく著書《藍絵の猪口》の中で、「一番驚くのは文様の変化である。この蕎麦猪口ぐらい衣装持ちは無いと言える」と述べている。主に、植物、昆虫、鳥、動物、自然模様、幾何学模様、判じ絵、逸話、天体、日用品などが単純化されて描かれている。

現代では蕎麦猪口が100円ショップで並んでいたり、洗練されたデザインのセレクトショップで、また骨董品として扱われるものまで多様な蕎麦猪口が同時に存在し、使われ方も多様化してきている文化的な部分にも面白みがある。



HIROPPA (波佐見)

(digital) Soba Choko

このプロジェクトの目的は、gobelet(フランス語でカップ)が持つ種類、多様な使われ方だけに注目するのではない。社会的、地理的、図像的、技術的な側面など、さまざまな次元で私たちの時代に疑問を投げかけるものとして扱っている。

日本における「蕎麦猪口」の解釈をケーススタディとして学際的に扱い、アプローチする研究として位置づけている。

メンバーとしてボルヌ現代陶磁センターのキュレーターたち以外にフランスと日本の美術系大学から教員、研究者、学生がチームとして加わっている。また陶芸家、画家、その他の芸術家たちも参加している。

(digital) Soba Choko プロジェクトは、さまざまな独創的な取り組みによって開かれていくものとして構成している。この独創的な取り組み、その組み合わせ自体が芸術的な提案を可能にす



《鉛筆の記憶》(1995-2001)
ジャン＝ルイ・ボワシエ



《鉛筆の記憶》(1995-2001)
ジャン＝ルイ・ボワシエ



studiowani (波佐見)

ることができると考えている。そして、この展覧会のために、特別に制作された蕎麦猪口だけでなく、集められた参考資料、作品や蕎麦猪口を取り巻く環境をできるだけ多く取り入れて展示されている。

ボワシエ氏が過去に制作したインスタレーション作品に「鉛筆の記憶」(1995-2001)というものがある。

整然と並べられた1024本の鉛筆と検索用のコンピューターがある。

観客は、鉛筆を見て得た情報(色、文字、モチーフなど)を入力して検索すると、その条件にあった鉛筆を見つけ出してモニター上に表示してくれる。そこには鉛筆の情報とボワシエ氏と鉛筆との短いエピソード(出会い)が表示されている。観客は、ショーケースに並べられた鉛筆を見ながら、気になる鉛筆を検索してそれに関する情報を得ることもできるし、自ら関心のある鉛筆を見つけ出すために思いついた言葉をコンピューターに入力して探し出すことも出来る。1024本の鉛筆のコレクターでもあるボワシエ氏は、この作品を鉛筆自身の記憶とボワシエ氏と鉛筆との出会いをオーバーラップさせている。

ボワシエ氏のねらいは、鉛筆をコレクションすることだけではない。鉛筆というメディアを多面的にアプローチすることができる題材として扱っているということなのである。

蕎麦猪口調査

インターネットの普及で蕎麦猪口の価値が世界的に共有されている。しかしこれまで通り蕎麦猪口の製造は、地元の職人によって受け継がれている。そこには今でも「民芸の精神」も受け継がれていると現地調査で感じた。

たとえば、日本磁器発祥の地、九州有田市にある大日窯。何世代にもわたって家族で受け継いでいる窯元であるが、非常にシンプルな手作りの装飾を維持してきている。現在も有田には数多くの家族経営の工房がある。そのなかでも溪山窯はより商業的なものとして、古い作品の複製など、伝統的なジャンルの専門分野を手がけている。

四国愛媛県にある砥部周辺の地域の蕎麦猪口は、ノスタルジーを避け、控え目で堅実さを持つスタイルが人気となっている。

近年、波佐見地域で活躍するデザイナーによって設立されたstudiowaniは、恐竜をモチーフにした蕎麦猪口をネット上で紹介して世界に発信している。素材と製造工程は昔ながらのものであるが、スタートアップ企業としての雰囲気も持ち備えている。

民藝とデザイン

柳宗悦とバーナード・リーチの友人である陶芸家・浜田庄司によって手掛けられた蕎麦猪口がある。



Found MUJI 青山店



「デジタル骨董展」
BE AT STUDIO HARAJUKU



《民主的工藝》
HUMAN AWESOME ERROR

伝統的で特徴のあるダークブラウン色で、鉄の質感を持つ益子で作られたものである。この蕎麦猪口は、2007年にミラノでデザイナーの深澤直人とジャスパー・モリソンによって優れた凡庸性を定義する「スーパーノーマル」の哲学であるように見える。今日、蕎麦猪口創作の流れは多岐にわたっており、陶芸家がレパトリーとして持つユニークな作品から、ポップでキッチュなイメージで表現するものまで広がっている。

MUJI

深澤直人が関わってきた無印良品 Found MUJI の取り組みは、「永く、すたれることなく活かされてきた日用品を、世界中から探し出し、それを生活や文化、習慣の変化にあわせて改良し、再生する」ことを目標にしている。2012年より継続的に地方の焼物を紹介し、2019～2020年には益子、萬古、砥部、萩の4つの地域の陶磁器を取り上げている。

民藝と深澤直人

日本民藝館館長である深澤直人のいう「ふつうさ」「可愛らしさ」が蕎麦猪口に当てはまる。あまりに普通すぎて意識にも残らないような「もの」が、実は一番使いやすく心地よかったりすることがある。それがロングライフに繋がっていく。蕎麦猪口にはムダのない方法でムダのないものとして作られているところが深澤直人の言う「ふつうさ」を彷彿させる。

価値・所有・NFT

2022年10月興味深い展覧会に出会った。「デジタル骨董展 ー これからの価値と所有を考える」2022.10.29(土)-11.13(日)
BE AT STUDIO HARAJUKU (ラフォーレ原宿 6F)

『NFTアートは100年後の「骨董」になりうるか?』をテーマとし、対極に位置する「骨董品とデジタルアート」を扱っている。愛好家によって代々継承されることで価値が形成されている「骨董」とNFTによるデジタルアートは同じ価値となりえるか、という投げかけである。この展覧会は、これからの「価値」と「所有」がこれからどこへ向かうのか検証するための展覧会である。NFTによってもたらされた「希少性の担保」と「所有者の明確化」が可能になった現在、価値とは何かを展覧会を通して問いかけている。(HPより)

そのなかでも本研究と関連性の高い作品があった。HUMAN AWESOME ERRORによる《民主的工藝》である。民藝の文脈でも名高い益子焼の器と、100円ショップで購入した器の双方にNFCタグ（情報を受け取る時に読み取る薄いタイプのタグ）を埋め込み、NFTと紐づけることで、骨董や工芸品における「価値」の意味を問い、価値が付与されていく過程を民主的に可視化しようとする試みの作品である。

(digital) Soba Choko 展 ボルヌ現代陶磁器センター
2022. 11. 26-12. 31

タイトルの「Soba Choko」の前には「digital」という言葉がついている。フランス語の [digital] には数字だけでなく指で数える意味も含まれている。

手と指の動きを習得する陶芸の技術を思い起こさせるタイトルとなっている。



(digital) Soba Choko 展 会場風景

展示会場は3つのエリアに分かれている。ラックが並ぶ壁には膨大な蕎麦猪口コレクションが展示された。

古いものから新しいものまで日本各地のそば猪口だけでなく、世界各地にある個人的な器（カップ）も展示されている。8つの円形テーブルには、美術学校でおこなわれたワークショップ、陶芸家やアーティストに開かれた実験的な工程から生まれた蕎麦猪口も展示されている。

2つの大きなテーブルには、来場者向けのアクティビティが用意されている。蕎麦猪口の使い方が学べるものと手作りまたはロボットを使用して蕎麦猪口の制作が体験ができるブースとなっている。



(digital) Soba Choko 展 会場風景

セラミック 3D プリンター

フランス、オルレアンからの研究者たちが設計して製作したセラミック 3D プリンターは、円錐台の回転、成型の作業工程など一連の蕎麦猪口製造に特化したものとして仕上げられている。

《chokoRA》スマートフォン用 AR アプリ（プロトタイプ）

昨年度に引き続き、AR 技術を使用したアプリケーションを開発した。蕎麦猪口という文字が記された紙をタブレット端末でカメラ越しに見ると、様々な文様の蕎麦猪口が 3DCG で現実空間の中に浮かび上がる仕掛けとなっている。デジタルテクノロジーによってここでは没入感をもたらすのではなく、目の前にある物体を見ること、それを自分のものにするのを可能にする試みである。



《chokoRA》
スマートフォン用 AR アプリ（プロトタイプ）

2023 年 12 月には「(digital)Soba Choko」展が新しいバージョンとしてショモン国立グラフィックセンターで展開される。この機会に《chokoRA》アプリも更新し、継続的なプロジェクトとして参加していく予定である。